

榎野川河口域・干潟自然再生協議会 ニュースレター

発行日：平成 18 年 10 月

発行・編集：榎野川河口域・干潟自然再生協議会 事務局

<アマモ場造成、検討・実証事業の取り組み>

平成 14 年度から平成 17 年度にかけて山口湾においてアマモ場造成実証試験に取り組み、アマモ場の造成手法について一定の知見を得ることができ、その結果を「山口県アマモ場造成指針」(平成 18 年 3 月)として取りまとめました。

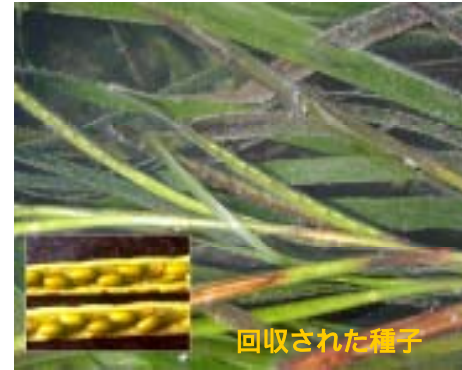
平成 18 年度からは、この指針に基づき、漁業者や地域の皆様等との協働によりアマモ場の造成に取り組んでいます。5 月 27 日にはアマモの学習会と現地での花枝採取を実施し、採取した花枝 1,500 本からアマモの種子を回収しました。11 月にガーゼ等にくるんだアマモの種を船上から投入する等の手法で種を撒きます。来年 5 月には成長し、アマモ場が形成されることと思います。



学習会の様子



花枝採取の様子



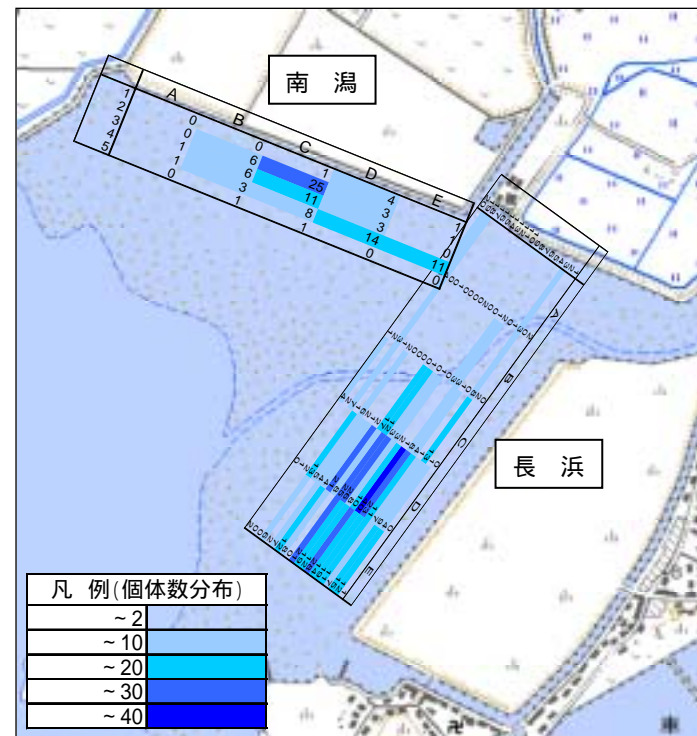
回収された種子

<カブトガニワーキンググループの取り組み>

山口湾のカブトガニ産卵場、生息場の保全を図るため、カブトガニワーキンググループ(原田直宏グループリーダー)の取り組みが実施されています。

平成 18 年度は、5 月 28 日にカブトガニ幼生の生息状況を把握するための現地調査を 16 名で実施し、2 齢から 9 齢までの幼生を確認しました。その後、山口湾(長浜、南潟)のカブトガニ幼生の生息状況を詳細に把握するために、8 月 27 日に約 35 名で「ラインセンサス法」を用いた分布調査を行いました。なお、このような調査は、山口湾では初めての試みです。

その結果、長浜では 555 個体、南潟では 101 個体が確認され、全体の量を予測する上での個体数の分布概要を把握することができました。今後とも調査手法等の精度を上げながら、継続して取り組む予定です。



<カブトガニ幼生の個体数分布>



ラインセンサス法によるカブトガニ幼生調査



カブトガニの幼生



カブトガニの卵

このニュースレターは、榎野川河口域・干潟自然再生協議会で話し合った内容や自然再生の取り組みの状況などをお知らせするものです。平成 18 年度の取り組み状況は以下のとおりです。

実施日	内容	
4 月	6 日	自然再生協議会(調査研究ワーキンググループ)
	27、28 日	拡大実証試験のモニタリング(春季:中潟、南潟)
	29 日	榎野川河口域・干潟自然再生協議会(第 1 回:通算 7 回)
	29 日	干潟耕耘実証試験(竹柵、やま、うね) 干潟観察会(南潟)
5 月	26 日	干潟モニタリング(南潟):目視調査(毎月実施) 以下同じ
	27 日	アマモ観察会(事業説明、種子採取)
	28 日	自然再生協議会(カブトガニワーキンググループ)
6 月	14 日	豊かな流域づくり推進委員会(第 1 回)
	7 月	15 日
7 月	24~26 日	拡大実証試験のモニタリング(夏季:中潟、南潟)
	8 月	6 日
27 日		カブトガニ幼生生息調査(自然再生協議会:カブトガニワーキンググループ)
9 月	13 日	干潟再生小委員会(第 1 回)

平成 18 年度に開催されました自然再生協議会の概要について紹介します。

<第 7 回自然再生協議会の概要:平成 18 年 4 月 29 日>

「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」の第 7 回目の委員会を 4 月 29 日(土) 山口県水産研究センター内海研究部で開催しました。当日の参加者数は 30 名(構成委員 57 名)で、一般の方も参加されました。今回は、第 1 期委員の任期が 3 月末で終了していることから、まず第 2 期委員の選任等が行われ、公募も含めたすべての方々の入会が了承され、第 2 期委員は 57 名でスタートすることになりました。

次に、会長及び会長代理の選任については、会長に中西委員、会長代理に鬼頭委員がそれぞれ選任されました。なお、委員会終了後、干潟耕耘実証試験が実施され、榎野川河口干潟(南潟)の再生に向けてスコップ等を用いた干潟の耕耘作業やアサリ等をナルトビエイの食害から防ぐための竹柵を干潟に打ち込む作業が、約 200 名の参加により行われました。



竹の設置状況



協議会の様子



やま耕耘の作業状況



観察会の様子



参加者約 200 名の記念撮影

資料の公開方法
協議会で公開された資料及び議事要旨等については、榎野川河口域・干潟自然再生協議会のホームページ(<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/fushino/index.html>)で公開しています。
ご意見・ご質問等の問い合わせは、事務局(山口県環境生活部環境政策課)に電話、FAX、メールでご連絡ください。
TEL 083-933-2690、FAX 083-933-3049、E-mail a15500@pref.yamaguchi.lg.jp

< 榎野川干潟再生の取り組み及びその状況 >

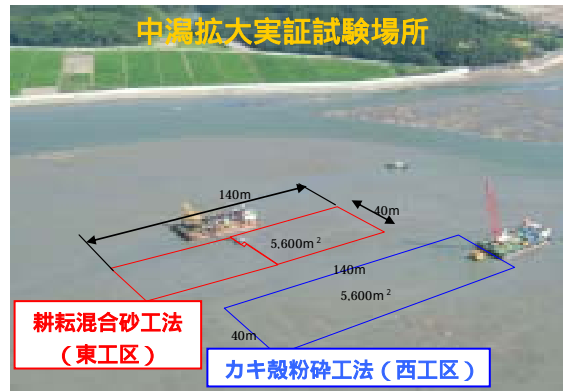
榎野川干潟等における自然再生の取り組みについては、平成 15 年度の干潟の詳細現況調査から着手し、平成 16 年度には、カキ殻が分布している中潟で置換実証試験、砂干潟や泥干潟の南潟や新地潟での耕耘実証試験を行いました。その結果等を踏まえて、平成 17 年度には中潟で拡大実証試験、南潟では耕耘実証試験等を行いました。平成 18 年度は実証試験のモニタリング等を実施し、事業の効果を把握します。



< 干潟再生拡大実証試験場所 >

【中潟での取り組み】

中潟においては、平成 17 年度に、平成 16 年度の小規模実証試験の結果を反映し、耕耘混合砂工法とカキ殻粉碎工法の 2 つの工法により、合計約 1.1ha の拡大実証試験を行いました(右下参照)。今回は、施工終了後から、約 1 年が経過した平成 17 年 8 月までのモニタリング結果を示します。



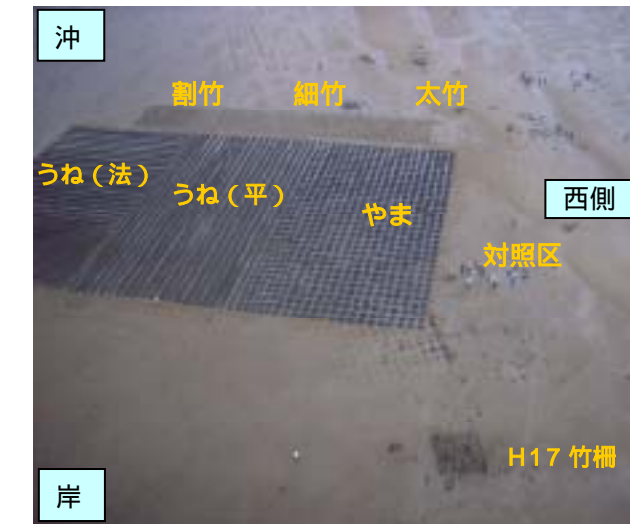
項目	結果の概要
底質(泥分)	施工当初は、地盤が非常に軟弱な状態でしたが、約 1 年が経過して、地盤が締まり、安定してきました。
底生生物(ベントス)	施工当初は、種類、量とも少ない状況でしたが、約 1 年が経過して、増加傾向にあります。また、これまでアサリはほとんど確認されませんでしたでしたが、試験区の一部でアサリの稚貝の着底・成長も確認されるようになりました。

【南潟での取り組み】

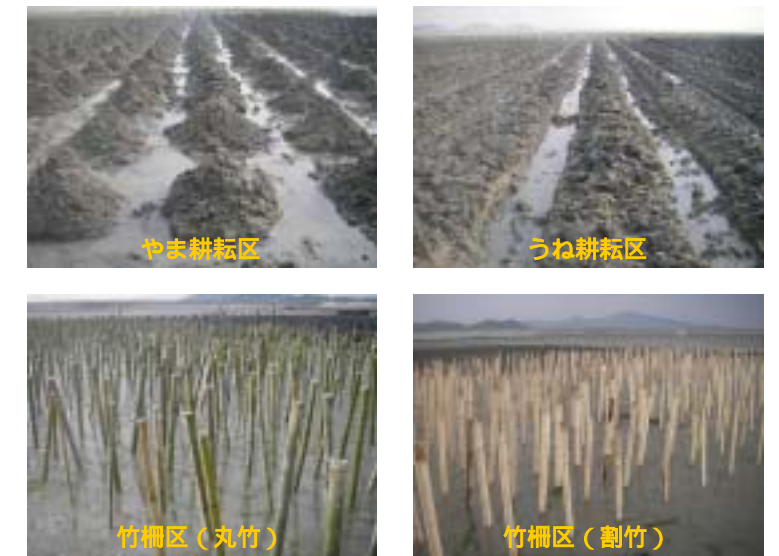
南潟においては、豊かな砂干潟の再生をめざして平成 17 年度には人力や漁船による干潟耕耘や竹柵の設置などを行い、二枚貝などに代表される干潟生物の生息環境改善に取り組んでいます。平成 18 年度は、各耕耘試験区で地盤レベルを揃えて実施することとし、平成 18 年 4 月に耕耘及び竹柵の設置を行いました。

< 南潟での干潟耕耘内容 >

作業項目	作業内容	規模	回数	備考
干潟耕耘	やま耕耘	30m x 50m	年 2 回	春秋(実施予定)
	うね(平行)耕耘	30m x 50m		
	うね(法線)耕耘	30m x 50m		
竹柵設置	竹柵	10m x 60m	年 1 回	割竹、細竹、太竹で実施
漁船耕耘	マンガの漁船曳航	20m x 200m	毎月	

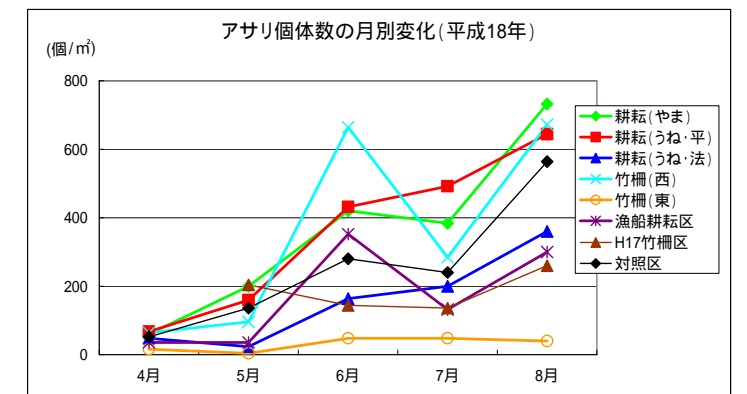


< 南潟耕耘実証試験区 >



4 月に少なかったアサリの個体数は、耕耘後の 5 月に 5 mm 程度のアサリの稚貝が確認できるようになり増加しました。試験区別では、やま耕耘区、うね(平行)竹柵(西側)で多く、全般的に西側の試験区で多い傾向を示しています。平成 17 年度には、9 月以降にアサリの個体数が減少傾向を示したことから、今後も注意してモニタリングしていきます。

また、ナルトビエイによる食害は、特に竹柵区で、エイの着底跡が少なく、食害防止にも効果があると考えられます。



< アサリの月別個体数変化 >

【その他の情報】

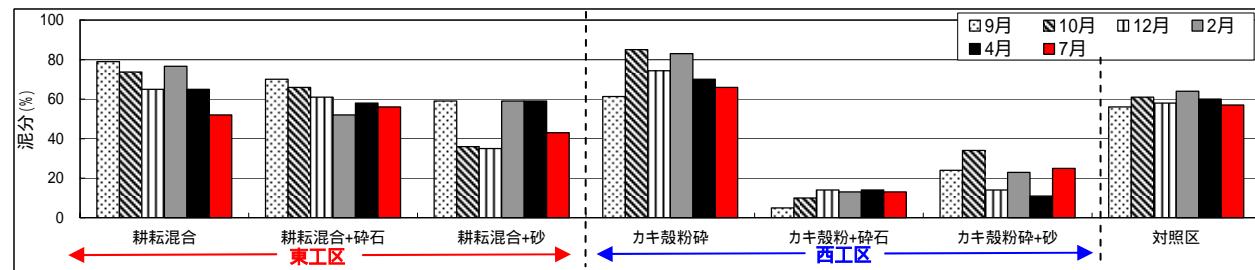
地元の方からナルトビエイの目撃情報をいただき、8 月 16 日に周防大橋上から、ナルトビエイを撮影しました。群泳個体は数十尾以上と推測されます(撮影者:水産研究センター内海研究部 内田喜隆)。



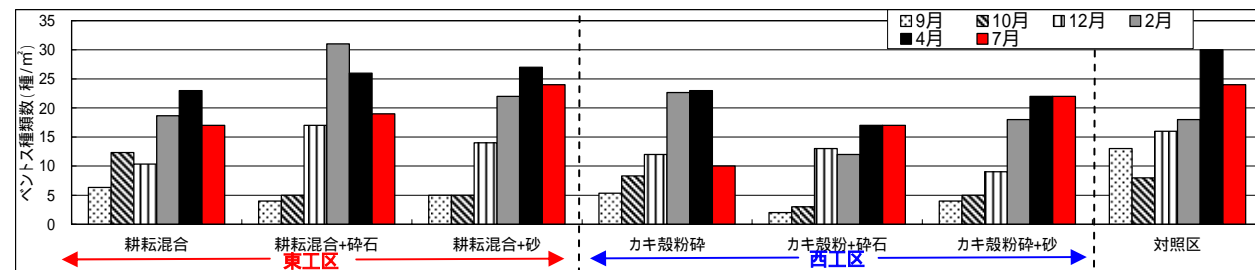
ナルトビエイの群泳(8月16日)



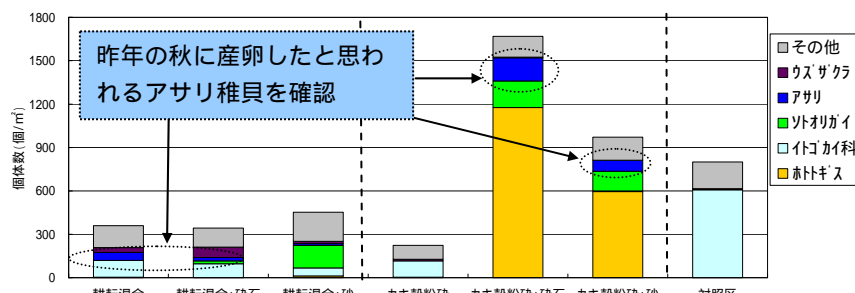
ナルトビエイの群泳(8月16日)



< 底質(泥分)の変化状況 >



< 底生生物の種類数の変化状況 >



< 底生生物の上位優占種(約1年後/平成18年7月) >



< 確認されたアサリ稚貝 >